

公正に判断できる主権者育成を目指す小学校政策学習

- 1 校種・教科・科目（分野） 小学校・社会科・政治
- 2 単元名 防災倉庫の活用方法について考えよう！
- 3 学習指導要領上の位置付け 第6学年（1）国や地方公共団体の政治
- 4 カリキュラムマップとの関連性 多様性の尊重 市民の権利と責任 平和で安全な社会

5 単元目標

知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性
災害に強いまちづくりを目指して行われている防災対策の意義と課題について理解できる。	防災対策の課題の解決方法について、地域社会の変化や災害時の地域社会の様子などに着目して多面的・多角的に考察、構想したことを表現することができる。	学習内容をふまえて、別の場所に設置されている防災倉庫の活用方法を考えようとしている。

6 単元の特徴（教材観）

本単元は、防災対策としての防災倉庫の有効な活用方法について考えることを通して、政治の働きについての理解を深めるとともに、政策を考える際には多様性を尊重し公正に判断することの重要性に気付かせることをねらいとしている。

現行の学習指導要領小学校社会科第6学年の内容「国や地方公共団体の政治」に基づいて授業の展開を検討すると、「国や地方公共団体の政治は、国民主権の考え方の下、国民生活の安定と向上を図る大切な働きをしていることを理解する」ために、具体的な取組の事例として「社会保障、自然災害からの復旧や復興、地域の開発や活性化など」を取り上げ、その取組の内容、決定までの過程、法令との関連性、予算などに着目して考察させることを重視した指導が行われると想定できる。

このような学習指導要領の趣旨をふまえると、小学校社会科「国や地方公共団体の政治」の単元を構想する際に特に重視することは次の点である。第一に、子どもたちの生活圏内にある身近な政策＝防災対策を教材とすることである。今回は、学校の敷地内に設置されている防災倉庫について、管理者の願いや設置までのプロセスや仕組みなどに着目して考察することで防災対



授業実践を行った小学校の敷地内にある防災倉庫

策の意義を理解させる。また、防災倉庫の現状を確認させ、批判的に考察し、備えの在り方を考えることが課題となることに気付かせる。防災倉庫は、市民の税金が投入されているものであり、公共財として捉えることができる。よって、防災倉庫を教材化することは、公共財の管理や運用の在り方を考えることにつながり、このことは地域社会の担い手の育成に資すると考える。第二に、防災をめぐる課題解決の在り方の探究を促すことである。そのために、同世代の仲間だけではなく大人である外部人材と協働的な議論を行う場を設定し防災倉庫のパネル案を提案させる。これによって、グローバル化が進む地域社会の変化を捉え、政策を考える際には多様性を尊重し公正な判断が必要になることに気付かせることができる。また、今回考えたパネルが他の防災倉庫に設置するものとして妥当なのかを考えるように指導することで、今回の学習成果をいかした探究を促すことができる。ここで特に強調したい点は、外部人材と子どもが防災倉庫の有効な活用方法という同じテーマについて考え、議論する学習環境の整備が公民育成を実質的なものにするためには重要になると言うことである。このような学習環境を整備するためには、外部人材と打ち合わせを行うことで単元のねらいや展開について共通理解を図っておく必要がある。つまり、外部連携を充実させるためには、外部人材の困りごとを教材化し、議論を通してその解決方法を提案する授業を構想することが有効であると言える。

7 単元計画

段階（時数）	学習活動	留意点
第一段階 政策（防災対策）の意義と課題の把握（2時間）	○地域にある防災倉庫の設置場所はどこでしょうか。なぜそこに設置されているのでしょうか。	・地域のハザードマップや災害対策基本法に関する資料の活用を通して、防災倉庫の設置されている指定避難所や福祉避難所の特徴について、理解させる。
	○防災倉庫の中には何が入っているのでしょうか？防災倉庫に入っているものにはどのような特徴があるのでしょうか。	・防災倉庫の中にある設備の特徴について、限りある予算の範囲内で避難者の命を守るために最低限必要なものが準備されていることを理解させる。
	○防災倉庫の設置や管理に携わっている人はどのような思いを持っているのでしょうか。 ○災害時に防災倉庫を有効に活用できるのでしょうか。	・地域の自主防災組織に補助金を支給する制度（「自主防災組織活動育成事業」）があり、地域の実態や住民の意見をふまえて防災対策を行っていることを理解させる。 ・鍵の場所などは一部の人にしかわからない状態であることから、防災倉庫の活用方法に課題があることに気付かせる。
第二段階 課題の批判的考察（1時間：本時）	○防災倉庫を有効に活用するために必要となるパネルの内容を考えてみましょう。 ○市役所の人はどういうことを考えたのだろうか？自分たちの考えと比較して、自分たちだからこ	・自分たちで予想させ、グループやクラスで意見をまとめさせる。 ・外部人材に事前に依頼をしておいて、パネル案を準備しておいてもらう。自分たちのパネル案と比較をして共通点や相違点を考察さ

	<p>そ考えることができたことはないでしょうか。</p> <p>○パネルの内容を考えるうえで重視すべきことは何だろう。</p>	<p>せる。</p> <p>・災害時に避難してきた災害時要援護者でも防災倉庫をあけることができるようにしておくこと。</p>
<p>第三段階 課題の構想 を通した提 案 (1時間)</p>	<p>○災害時にはどのような人たちが避難してくることが想定されるのでしょうか。</p> <p>○防災倉庫に掲示するパネルにどのようなことを表記すべきでしょうか。議論をして考えたことを提案してみましよう。</p> <p>○今回、学習したことをふまえて別の防災倉庫のパネル案を考えてみましょう。</p>	<p>・資料活用を通して、高齢者を含めた様々な世代やハンディキャップを持つ人たち、外国人の人たちが想定されること、世代別人口の変化や地域のグローバル化が進んでいることを理解させる。</p> <p>・例えば、防災倉庫の設備の内容、鍵の場所、みんなで活用する際には思いやりをもって！というメッセージ。点字や多言語で表記するという意見が想定される。</p>

本単元は、総合的な学習の時間の授業などに関連付けて実践することも可能である。例えば、先述の単元計画の1～2時間目までの授業を社会科の授業として行う。ここでは、防災倉庫に関する政策の内容や設置までの過程、地域住民の意見を反映した制度の仕組み（自主防災組織の活動など）について理解を深めることを重視する。3時間目以降は、総合的な学習の時間の授業として行う。その際には、防災倉庫の有効な活用方法についての多様な意見をまとめたうえで、パネルを作成する活動を実施する。

防災の内容については、理科などの他教科においても取り扱うことが想定されている。例えば、理科の学習指導要領「第3指導計画の作成と内容の取扱い」には、「(4) 天気、川、土地などの指導に当たっては、災害に関する基礎的な理解が図られるようにすること。」と示されている。加えて、「(6) 博物館や科学学習センターなどと連携、協力を図りながら、それらを積極的に活用すること。」とあり、外部機関と連携を通じた授業づくりの推進が要請されていることがわかる。このように各教科で取り扱う防災に関連する内容の特性及び外部機関の効果的な活用という視点をふまえつつ、公民育成に資する授業を展開することが重要である。

他教科の接続を想定した授業づくりを推進するためには、教員同士の意見交換の場の整備が欠かせない。「防災」などのテーマは、教科の学習の成果を活かして思考を深めることができるものであり、子ども自身が学習の社会的意味を見出すことができやすいと考えられる。だからこそ、教員同士が意見交換を活発に行い、カリキュラム・マネジメントを実践することを通して、その学校にしかないオリジナルなカリキュラムをデザインすることが必要なのである。多くの教科を一人の教師が担当する小学校では、教科担任制となっている中学、高等学校に比べるとカリキュラム・マネジメントを行いやすいと考えられる。また、「防災」については、小学校だけでなく中学校や高等学校においても取り扱われている。よって、地域の異校種の教員との交流の場を設けて、防災教育をどのように進められているのかを共有し、子どもの発達段階に応じた防災教育の授業の在り方について議論することも、カリキュラム・マネジメントの推進につながると言える。

9 本時の授業展開

ここでは、第二段階の「課題の批判的考察」に相当する授業の展開を説明する。まず、前時までの復習として、防災倉庫の有効な活用方法を考えることが課題になることを確認する。そのうえで、「防災倉庫を有効に活用するために必要となるパネルの内容を考えてみましょう。」という学習課題を提示して、パネル案を考える活動を行う。ここでは、グループごとに考えた案を、各クラス（1組・2組）でまとめ、学年全体で共有した。以下の図1がクラスの意見（パネル案）である。

【1組の意見】

- ・かぎのある場所
- ・入っているもの
- ・最低限のものしか入っていない（食料はないです！）
- ・まわりの人のことを考えてものをとろう！
- ・必要のないときはかぎをあげない。
- ・必要なとき・状況のこと。

【2組の意見】

- ・かぎのある場所・連絡先（教頭先生）
- ・入っているもの（量など）
- 「食料は少ないです。」
- ・限りがあるのではありません！をみんなで仲良くわけましょう！
- ・職員室までのルート（地図）
- ・リモートロックにする。

図1 クラスごとのパネル案

学年全体で共有する際には、二つのパネル案を比較させ共通点を確認することにした。

図1中の赤文字下線部が共通点を示している。今回は、「かぎの場所」や「入っているもの」が挙げられていることがわかる。

つぎに、市役所担当者に事前に依頼して考えてきてもらったパネル案を確認した。以下の図2は、市役所の担当者のパネル案である。

【市役所担当者の意見】

■この防災倉庫は、非常災害時や避難所運営に必要な物が入っています。

発電機	1	投光器	1	簡易トレイ	1
簡易トイレ用テント	1	屋内テント	1	間仕切り	1
衛生用品ボックス(マスク等)	1	〇〇〇〇	1	〇〇〇〇	1

■鍵は、次の場所に保管してあります。

野村小学校(職員室)	0894-72-0027
西予市野村支所(総務課)	0894-72-1112
西予市役所(危機管理課)	0894-72-6491
〇〇地区自主防災会(〇〇公民館内)	0894-72-.....

■定期的な倉庫内の整理や、訓練とあわせて設備の点検をしましょう。

故障や異常を見つけた場合は、速やかに設置者まで連絡してください。

【設置者】西予市危機管理課

図2 市役所担当者のパネル案

ここでは図1と図2を比較させ、授業者から「自分たちの考えと比較して、自分たちだからこそ考えることができたことはないでしょうか。」と問いかけることで、「自分たちのパネル案と市役所担当者のパネル案との共通点や違い」を確認させた。ここでは「かぎの場所」や「連絡先」、「入っているもの」については共通点として捉えるとともに、防災倉庫に入っているものの特徴(「最低限のものしか入っていない」、「限りがある」)についての表記は、自分たちだからこそ考えることができたことに気付かせることができた。そして、「パネルの内容を考えるうえで重視すべきことは何だろう。」と問いかけ、地域みんなの安心・安全につながることを最も重視すべき点であることを確認したうえで、「みんな」とは誰のことなのかを考えさせた。子どもたちからは、「家族」や「高齢者」という発表はあったものの、それ以外の人たちについては想定されていない様子だった。そこで、次時の授業で防災対策を考える際に、優先して考える必要がある「災害弱者」という立場の人たちのことを学習していくことを伝え、授業を終えることにした。その後の授業では、「災害弱者」として想定されている人たちを資料に基づいて確認したうえで、地域にはどのような人たちが生活しているのかを人口統計などの資料活用や市役所の担当者への質問を通して理解を深める学習活動を行った。このような活動を通して、地域には外国人の方が生活をしていること、近年は外国人の数が増えていることを知り、地域のグローバル化が進展していることについて理解させた。このような理解を促す指導を行うことを通して、子どもは自分たちが考えたパネル案を見直すことが必要であることに気付かせることができた。

当日の授業の様子



10 生徒の学習成果とその評価 児童生徒の学びの実態を記述する。

本単元の学習成果として、子どもは以下の図3のパネルを作成し、防災倉庫に設置した。また、本単元の授業の様子は2022年3月30日付の愛媛新聞朝刊に掲載され、社会に発信された。

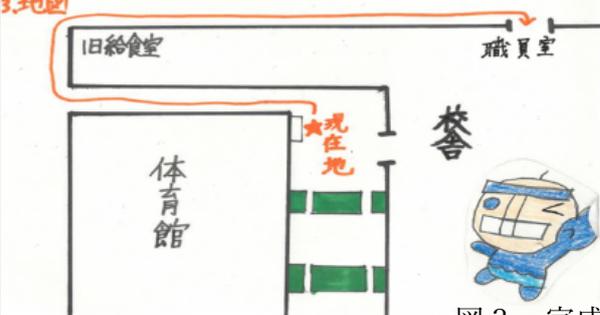
<p>1. かぎについて</p> <p>防災倉庫について</p> <p>かぎは、職員室にあります!! 職員室に先生がいるときといないときがあります。 いないときは、こちらにお電話ください。</p>									
<p>2. 電話番号</p> <p>野村支所総務課 ★こちらをお先におかけください。 0894-72-1112 危機管理課 0894-62-6491</p>	<p>4. 説明(注意)</p> <p>食料は入っていません!! 命を守る必要最低限な物しか入っていません。 しっかり防災リュックを持てきましょう。 みんなで分け合、て使、てください。 決して一人の物ではありません。</p>								
<p>3. 地図</p> 		<p>5. QRコードについて</p> <p>これは、防災倉庫についてのことかわかしくかいてあります。 かざしてください。 Scan the QRcode.</p> 							
<p>6. 中に入っているもの</p> <table border="1"> <tr> <td>発電機</td> <td>防護服</td> <td>即應シtent</td> <td>簡易トイレ</td> </tr> <tr> <td>マスク</td> <td>消毒液</td> <td>扇風機</td> <td></td> </tr> </table>		発電機	防護服	即應シtent	簡易トイレ	マスク	消毒液	扇風機	
発電機	防護服	即應シtent	簡易トイレ						
マスク	消毒液	扇風機							

図3 完成版のパネル

本単元の評価は、子どもの社会参加意識の変容を見取することを目的としたアンケート調査及び本単元の学習の振り返りを行う際に活用したワークシートの記述内容に基づいて実施した。特に公正な判断の重要性に気付くことができているかどうかを見取るために「防災倉庫のパネルを考える学習活動で重視するようになったことはどのようなことか」といったような問いをワークシートに設定し、子どもの記述内容を分析した。アンケートの結果（表1）と子どもの主な記述内容（表2）は、以下の通りである。

表1 アンケートの結果 (n=54)

<p>【質問項目：①～⑦の中で特に自分の意識が変わったと感じるものはどれですか。】</p> <p>①社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関与したい（27.3%）</p> <p>②将来の国や地域の担い手として積極的に政策決定に参加したい（政策とは「社会問題の解決方法」のことです。）（11.5%）</p> <p>③政策や制度については専門家の中で議論して決定するのが良い（9.3%）</p> <p>④子どもや若者が対象となる政策や制度については子どもや若者の意見を聴くようにすべきである（31.5%）</p> <p>⑤私が参加することによって、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない（5.6%）</p> <p>⑥社会のことは複雑で私は関与したくない（7.4%）</p> <p>⑦私個人の力では政府の決定に影響を与えられない（7.4%）</p> <p>【④に回答した子どもの主な意見】</p> <ul style="list-style-type: none">・子どもの意見を聞くことで大人の中で出なかった意見が出て、新しい制度などができる可能性があるから。・子どもや若者の意見を聞いてまだ実行されていないことがされるかもしれないから。・子どもや若者は公の場にあまり出ないから。・いつも大人が決めていて、子どものことは、あまり考えてないと思ったから。
--

表1について、最も多くの子どもが回答した項目は「④子どもや若者が対象となる政策や制度については子どもや若者の意見を聴くようにすべきである（31.5%）」で、ついで「①社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関与したい（27.3%）」という結果となった。「④子どもや若者が対象となる政策や制度については子どもや若者の意見を聴くようにすべきである」と回答した理由についての子どもの主な意見をみると、「子どもの意見を聞くことで大人の中で出なかった意見が出て、新しい制度などができる可能性があるから。」や「子どもや若者の意見を聞いてまだ実行されていないことがされるかもしれないから。」といったものが確認できた。このことから、本単元の学習を通して一定の割合の子どもは、社会問題の解決方法について考えたり関わったりすることに意味を見出すようになってきていることから、主権者としての意識形成を実現することができていると言える。

表2 ワークシートの主な記述内容

○問い①「防災倉庫のパネルを考える学習活動で重視するようになったことはどのようなことですか」に対する主な記述内容

【子ども X】

みんなが納得できるようにすること。納得しても内容がわからないと意味がない。その間を考えることが重要だと思うようになった。みんなに確認することも大事だと感じるようになった。その理由は、友達に「本当にそれは重要なのか。」をいわれたからです。周りの意見を聞いてみるのが大切と感じた。

【子ども Y】

最初は何を考えたらいいかわからなかったけど、考えていく中で地図のわかりやすさ、どう書いたらわかりやすくなるか、絵（イラスト）をわかりやすくことを重視するようになった。今いるところをわかりやすくする。パネルを外国人を含めて誰が見てもわかるように方向・向きに気をつけて地図をかくようにしました。

○問い②「今回の学習を振り返って気付いたことや感じたことを記入してください。」に対する主な記述内容

【子ども X】

大変な時もあったけど、これがみんなにとって役に立つと思ったからがんばれた。QRコードをいれるかどうかで意見が対立した。中学でもこういう学習をやってみたいと思う。その理由は、みんなにとって役立つことだから。

【子ども Y】

優先順位を考えるのが大変だった。最初にどんなことを書くか、どんなことを目立つように書くかについても深く考えないといけないことに気づくことができた。他の防災倉庫を見てみるとわかりにくいところにあるし、活用できないなと思うからみんなが活用できるような方法を考えてみたいと思う。

*子ども X と Y は、それぞれ同じ子どもを示している。

表2について、子ども X は問い①に対して、パネルを考えるうえで「みんなが納得すること」、そのためには「みんなに確認すること」が重要であると気付くようになっていることがわかる。そのように考えるようになった理由は、友達からパネルの内容に対して「本当にそれは重要なのか」と指摘されたことを挙げている。また問い②に対しては、大変さを感じつつも「みんなにとって役立つと思ったからがんばれた」と振り返るとともに、「中学でもこういう学習をやってみたいと思う。」というように意欲的な姿勢を持っていることがわかる。これらのことから子ども X は、学習内容を「みんなにとって役立つこと」であると捉え、学習に対する意味付けを行うことができるようになっており、これにより学習過程で生じる大変さや難しさを克服する力が育まれていると推察できる。

子ども Y は問い①に対して、最初は学習に対して戸惑っていたが、「パネルを外国人を含めて誰が見てもわかるように方向・向きに気をつけて地図をかくようにしました。」というように、これまでは想定していなかった他者のことをふまえて、パネルの内容を判断するようになってきていることがわかる。また、問い②に対しては、その記述内容から「優先順位を考えること」が公的な問題を考えるうえでは必要になることに気付くようになってい

ることがわかる。加えて、「他の防災倉庫を見てみるとわかりにくいところにあるし、活用できないなと思うからみんなが活用できるような方法を考えてみたいと思う。」という記述から、他の防災倉庫に対しても意識的にその在り方を検討しようとしていることがわかる。これらのことから、子ども Y は本単元の学習を通して日々の生活で経験することと本単元で学習したことを関連付けて、捉えることができるようになってきていると推察できる。

1 1 「18 歳市民力」育成に向けての提案

「18 歳までに必要となる市民力」とは、公的な問題について様々な世代や立場の人たちと協働して考えることに意味を見出すことができる力と言えるのではないか。このように「18 歳市民力」を捉えるのであれば、これからの社会科・公民科の授業は、学校外の人たちとの対話や議論が学習活動の中心になると考えられる。その際に重要となるのは、大人と子どもの双方向性を重視したコミュニケーションを可能にする学習環境を整備することである。本単元では、「防災」を主たるテーマとして設定し、防災倉庫の有効な活用方法という地域社会のリアルな課題を学習内容の中心に据えた授業モデルを提案した。防災倉庫の活用方法は、学習に携わってくださった大人も考えたことがない「困りごと」だったのである。この「困りごと」の解決方法を考えるための議論を展開することは、双方向性を重視したコミュニケーションを可能にする。つまり、大人にとっても子どもと関わることに對して積極的な意味を見出すことにつながるのである。このことに関連して学習に携わっていただいた市役所の職員の方に、インタビューを実施して本授業を振り返っていただいた。その際に、「子どもとの意見交換を通して、防災倉庫が食料保管庫として捉えられていたことを知り、これからの防災対策を考えるうえで大変参考になった。」という意見をいただいた。このことを子どもにフィードバックすることで、大人が自分たちと関わることに對してどのように思ったのかを確認することができ、自分たちの学習活動の影響を理解することができる。これによって、子どもは大人と関わることに對して意味を見出すようになるのである。

これからの社会科・公民科授業には、社会問題について様々な他者と協働的な議論を通して解決することができる力の育成がこれまで以上に要請されると考えられる。このような社会的な要請に応えるためには、他者と協働することに意味を見出す学習環境を整備することが必要となる。これは教師だからこそできることではなかろうか。「18 歳市民力」育成を目指す社会科・公民科の授業の在り方を検討することは、従来までの教師の在り方を問い直し、新たな役割や可能性を広げることにつながるのである。

(参考文献)

- ・ 桑原敏典編著『高校生のための主権者教育実践ハンドブック』明治図書、2017 年。
- ・ 松岡尚敏「社会科教育における地域連携の動向と展望」日本社会科教育学会『社会科教育研究』NO.102,2007 年,pp.1-12.
- ・ 前田賢次「地域をともにつくる教育実践の現状と課題—小学校段階における社会認識形成と地域への関与をめぐる—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』NO.131,2017 年,pp.25-38.
- ・ 長瀬拓也『社会科でまちを育てる』東洋館出版社,2021 年。

- ・井上昌善「外部人材の活用を通して社会的有用感の育成を目指す社会科授業構成：中学校社会科単元における外部人材に対する教師の働きかけに着目して」日本社会科教育学会『社会科教育研究』NO.144,2021年,pp.12-26.
- ・井上昌善「外部人材と子どもの熟議を促す社会科授業構成の原理と方法：地理的分野『地域に届けるハザードマップ』の開発と実践を通して」全国社会科教育学会『社会科研究』95号,2021年,pp.1-12.
- ・井上昌善「5最新情報で考える！価値ある学習課題と分野に応じた授業デザイン 公民公正な判断の促進と社会とのつながりの実感」明治図書『教育科学 社会科教育』2022年3月号,pp.32-35.
- ・フレッド・M・ニューマン(著)渡部竜也・堀田諭(訳)『真正の学び／学力』春風社,2017年.
- ・ハロルド・バーラック他(著)渡部竜也他(訳)『真正の評価 テストと教育評価の新しい科学に向けて』春風社,2021年.
- ・井上昌善他「学校と地域社会の連携を通じた主権者教育授業実践ハンドブック」博報堂教育財団第15回児童教育実践研究成果報告書,2022年.
- ・西予市では、平成30年7月の豪雨災害後に「災害から学ぶ」パッケージ学習を展開している。詳細次の西予市HPにある「災害から学ぶ」パッケージ学習事業を参照のこと。
https://www.city.seiyo.ehime.jp/kakuka/seisaku_kikaku/fukkoushien/9013.html (2023年2月9日確認)

井上昌善 (愛媛大学)